
とある科学の自家発電《ブライト・ポイント》

蕎麦麦茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブライト・ポイント
とある科学の自家発電

【Nコード】

N8889X

【作者名】

蕎麦麦茶

【あらすじ】

大戦後の学園都市。

ここに、一人の少年がいた。

欠陥品と言われ続けたこの能力に、何の意味を見出すのか。
チカラ

今日も間延びした声が響く。

「ジャッジメント
風紀委員だつての！」

プロローグ（前書き）

この小説は二次創作です。

なので、自己の勝手な解釈とか色々あります。

時系列は大戦後、上条さん生存しています。

新約をまだ買っていないから分かりませんがね。申し訳ないです。

稚拙な文ですが、頑張りますので応援をできたならばお願いします。

感想等歓迎です。

では、始めます。

ブローグ

筋ズシトロフィーという病気がある。筋繊維が脂肪化するなどと言った特徴で筋繊維束の構造が失われる病だ。十代あたりで車いす生活を余儀なくされ、二十代前後で心不全や呼吸困難で死亡してしまう。延命治療はあるが、完治する見込みはない。

「学園都市……ですか？」

「ここは、日本のとある病院。」

「ええ、あの東京の……。あそこならば、科学はもちろん医療も発達しています。正直、ここでは進行を食い止めるかおろか、延命治療が出来ません。お子さんの将来を考えるならば、可能性に欠けて

も……」

女性と初老の医者が話をしていた。

「ですが、あの子一人で生活できるかどうか……」

女性が気弱に声を出す。今までつきっきりで世話をしていたというのに、大丈夫なのだろうか。

「なに、心配は要らない。私の知り合いに学園都市の名医がいますね。紹介状と口添えで資金面は心配ありません。後は、お子さん次第ですね」

医者が心配をさせぬよう、力強く頷いた。女性も安堵したのか、涙目になりながらも頭を下げた。

「ありがとうございます。本当、なにからなにまで……」

視線の先にはベッドに横たわる幼い少年。

「……聞ってるじゃん？」

とある高校の職員室。

「あ、聞いてます。ウチの風紀委員がまたご迷惑をお掛けしたよう
で……」

すいません、と頭を下げる少年。対する女性はジャージで身を纏いながらも、大人の色香を醸し出していた。スタイルのいい、引き締まった体に豊満な胸。彼女自体に化粧という概念がないらしいが、それが逆に彼女の魅力を引き出している。髪の毛を頭の後ろで適当に一つに結んでいた。名前は、黄泉川 愛穂。少年の通う高校の担任でもある。

黄泉川はかんらんかんらと笑って、

「ゴタゴタも全て片付いたから心配要らないじゃん。結構長引いたけど、これで気兼ねなく飲みにいけるじゃんよ」

両手で酌をする。その行為は「飲みに行くという動作だ。未成年相手に何をしているのか。」

「はあ……」

飲酒とはほど遠い年齢の彼は、曖昧な返事するが、

「時にお前、またレベルが上がったり下がったりだつてね。自分だけの現実が安定してないのが原因じゃんよ。三ヶ月前はlevel 4まで手が届きそうだったのに、一週間前ではlevel 2つて、どういう中身してる？」

絶妙な指摘を受けた彼は、身をたじろがせて、

「うつ……。でも、三ヶ月前は能力が上手く噛み合ったから」

先に逃げ道を作ったが、

「超電磁砲のか？　いくらあの子のDNAマップを移植して自分だけの現実を阻害されたとは言え、この振り幅は異常じゃん。またペツトでも拾ったか？」

あっさり看破された。肩を落とした彼は、黄泉川の話（殆ど）聞き流し、重い足取りで職員室を後にした。

少年の話をしよう。

少年は、学園都市に自分の病を治す目的で住み始めた。当初の目的は治療のみだったので、能力開発は受けていなかったのだが、何かの手違いで開発を受けてしまった。

その後に、超電磁砲と呼ばれるlevel5のDNAマップを移植。厳しいリハビリの後に、激しい運動も出来るような体となった。

しかし、DNAマップを移植すると言うことは、自分だけの現実さえも移植してしまう。超電磁砲の自分だけの現実が少年の自分だけの現実と半ば混じり合ったような中途半端な自分だけの現実が生まれてしまった。開発を受けた時の能力は肉体活性系のlevel2だったというのに、移植後は自分だけの現実が不安定になったり、能力も意味の分からないものになり、level1が上がったり下がったり、白い人に間違われ舌打ちされたりと難儀していた。

今はlevel3と2を言ったり来たりしているが、情緒不安定《level2に最も近いlevel3》と不名誉極まりないあだ名

を付けられている。

最近になって、黒い髪の毛が段々茶髪になっている。移植のせいでもあるし、何せ目立つ。黒い髪に茶色のメッシュが入っているような、イケイケのバンドマンと間違われるような頭だ。担任の黄泉川は非行に走るまいか心配、はしていなかった。「更正のしがいるじゃん」と意気込んでいた。さらに、よくしてもらっている、隣のクラスの月詠 小萌は「いつから不良少年になっただんですかー！」と、涙目になって（実際泣く寸前で）叫んだ。その直後に、小萌のクラスの子に「お前何してんだにやー！！」「小萌先生を泣かせたんはお前かああああ！！」「いくらお前でも先生を泣かせるんなら、まずはそのふざけた性根を叩き直す！！」主に三人に私刑^{リンチ}を喰らった。いくら勘違いとは言え、消火栓は死ぬかと思った。

重い足取りで教室に戻り、薄い鞆を持って学校を後にした。下校中に不幸だという叫び声が聞こえたが、それはこちらのセリフだと突っ返したくなった。

プロローグ（後書き）

主人公は後々に説明する予定です。

次は、好きなキャラを出してみようと思います。

口調の真似が難しいですのとあるのキャラは……。

とある家主と住民たち

第七学区。

少年の通っている高校の寮があるところだが、少年はその寮とは少し離れた場所に住んでいる。学園都市側の配慮も含めてか、少々広い、マンションに住んでいる。学園都市側の配慮だが、詳しくは彼がいた研究施設の勝手なご厚意である。

彼の能力が奇抜で、一時期研究所、正式名称は特例能力者多重調整技術研究所。略すると特力研。そこに所属していた。

そこは、デュアルスキル多重能力者の研究と実験を主体とした施設である。本来、能力者は一つの能力しか使えず、二つの能力を出すのは不可能だと結論が出ている。それを出すのに幾分の犠牲を出したのだろうか。想像するだけで胃に穴が空く。

「たーだいまだっての……」

嫌なことを思い出して溜息を吐く。少々広い玄関で靴を脱いで、くたびれた学ランをリビングで脱ぐ。学ランを適当に椅子に掛ける。冷蔵庫からムサシノ牛乳を取り出して、パックのまま飲み干した。仕事に疲れた社会人がビールを呷るように、ぷはぁ、と息を漏らした。

「……しまった。また買いに行かなくちゃ」

「無然、また私が買いに行かねばならんか」

ひとりごちた少年に廊下から声が掛かる。ドアを開けてやると、緑色の髪をしたすらりとしたという言葉が似合う青年がリビングに入ってきた。簡素ではあるが、スーツを着こなし、顔は火傷の後が酷いが、それでもなお、顔立ちが整っていると言える。両手にスーパーの袋をぶら下げているとなると、新人の研究者にしか見えない。

「お、おかえり。いやいいよ。今度、後輩にでも買いに行かせるから」

「……家主の意向とは言え、後輩に買いに行かせるのは流石に酷だ
と思うのだが」

青年は、スーパーの袋を台所に置き、中身を冷蔵庫の中へと移す。
肉、野菜、冷凍食品、清涼飲料水、菓子類、果物、酒。……缶詰は
余所に置き、冷蔵庫の扉を閉める。

「いやいや、使えるものは最大限に使わねえとな。坊主の言い分は
間違っちゃあいないぜ」

欠伸混じりにリビングから出てきたのは、顔に入れ墨をした男。皺
だらけの白衣を着ているということは、何かに没頭していたのか。

「……木イイイ原くウウウン」

腹の底から唸るように少年は声を出す。男、木原 数多は嫌そうな
顔をして、少年を睨んだ。

「その言い方止めてくんねえ？　いつアイツに出くわすかたまったもんじゃねえ」

木原は、とある能力者の開発を担当していた。九月三十日にその能力者を殺すように学園都市から指令が降りた。

当然、木原は最後まで反対したが、彼以外に適役はいないと突き返された。己を殺して、彼の所持していた部隊、ハウントドッグ 獵犬部隊を率いて抹殺に踏み込んだ。しかし、土壇場で能力者の能力が覚醒。文字通り空の彼方まで吹き飛ばされた木原だったが、数時間後、イギリス領海にて生存が確認された。その後、応急処置を終え学園都市に舞い戻ったのだが、木原は死んだと殆どの人間は思っているので、安易に表を出歩けない。

そこで、途方に暮れていたのを青年が呼び止め、この家に住ませることになった。今は極秘に能力開発の研究に携わっているが、昔のように冷酷ではない。主に置き去り《チャイルド・エラー》の能力を発現、向上させる方向に力を入れている。そうすれば、路頭に迷う者も少なくできるし、新たな置き去りを生み出さないような予防線となるのだ。

顔は厳つく、筋肉に恵まれた体つきをしており、近寄りがたいが、

「中身は優しく、まるで父親のようだ」

「オイ待て、一体誰に喋ってやがる」

コップに麦茶を注いで一服した木原が、少年に鋭く言葉を吐く。その少年は気にせず、テレビのスイッチを入れた。液晶画面に男性が映る。

『学園都市の子供たちへの選挙権の付与について……』

「あー、そんな物あったねえ。完全に忘れてたっつの」

「必然、それよりも大切なことがある。頭から抜けるのも無理もない。……晩飯の用意ができた。配膳の用意を手伝ってくれ」

ソファーに寝ころんで間延びした声を上げ、少年は立ち上がって炊飯器の蓋を開ける。まさに銀色に光る米を眺めて、親の仕送りの米は美味いんだ、と呟いた。

とある家主と住民たち（後書き）

私の趣味漬けで申し訳ないです……。

でも、木原くんマジお父さん。

緑髪の青年はあの人です。好きだから出しました。

原作がどうなっているのかはよく分からないから自由にさせてもらってます。

ここで一つ説明をば。

主人公が住んでいるマンションは上条さんたちの寮から少し離れたところにあります。

4LDKと少し広めですが、住んでいる人数も考えて、妥当かと。

木原くん生存は主に住人と土御門、一部分の暗部の人たちが知っています。一方通行は知りません。哀れ。

次は緑の青年との邂逅と大切な話を書きたいと思います。

ではまた。

とある青年の考え事

「さて、大切な話をしよう」

晩御飯を食べている最中に少年は箸を置いた。味噌汁を啜っていた青年はお椀を置き、木原は漬け物に手を伸ばしていた。

「大戦の前に、第二位が第一位に喧嘩を売ったのは覚えているよね？」

「必然、あれにかまけていたせいでタイムサービスに間に合わなかった」

どこか拗ねた顔で青年は頷く。木原も同じのようだ。病室から聞いたに違いない。

「あのときミンチにされた第二位は、脳味噌を等分されて能力を行

使用するだけの体となった。だが、最近になってお役目御免となっらしい。……そこでだな」

「また、“拾い”に行くのか？」

漬け物を飲み込んで、木原は投げ掛けた。少年はうん、と頷いた。正直、少年だけでは出来ることが限られている。先の大戦にしても、ロシアに行っただけで別段何かをしたというわけでもない。ただ、友達を助けたただけだ。英雄というのではない、ただの人間に過ぎない少年は友達を羨んだ。あんな真っ直ぐな友達に。

話を戻すと、半分裏の世界に脚を突っ込んでいる少年だが、風紀委員ジャッジメンツという役職に就いているので、下手に動き回れない。従って、裏の世界の住人である第二位を養えば、情報の獲得に苦労はしなくなる。木原のときもそうだが、「能力開発の人が来ねえかな」とボヤいていると、それに見合った人材が来る。単なる偶然と言っても差し支えない。しかも今度は第二位。願ったり叶ったりだ。

「技術の進歩って怖いよな。あんな体になっても復元されるらしいよ」

「マジかよ」

「マジもマジ、大マジだったの。しっかりしろよ科学者。明日、第二位が処分されるらしいからそこを強襲して奪っちゃおうぜ」

口調は軽く、今からゲームセンターにでも行くうぜ、と言うような口振りをする少年。しかし、話している内容は軽くはない。人の命が掛かる、一つの間違いも許されない作戦。

青年は目を瞑り、過去の記憶に思いを馳せた。

……ちよい待ち。風紀委員だったの！ その怪しい赤髪神父、肩に担いでる男を引き渡しな！

……どうやら、君は思っていたほど人間が出来てないようだね。

……名を名乗れ魔術師！ 人を助けることに貴賤はねえっての！

……負けたよ。どうやら君は、僕の思っていた以上に人間が出来て
いるらしい。

……私は、誰だ？

……お前は、記憶喪失らしい。だから、ゆっくり思い出していこうぜ。

……記憶関係は最近もう一人やったからね。君の場合はまだましな方さ。

「……どうした？」

「少々、思い出せない記憶があった」

先程から黙っていた青年に、少年は心配そうに問いかけた。青年は頭を振って味噌汁に再び手を伸ばす。

「最近になってからは細部までは行かないが、少しだけ過去に遡れた。もう少しかもしれぬ」

箸で器用に豆腐をつつきながら、青年は淡々と告げた。記憶の復活は、彼の生きる上での最大の目標であるだろう。しかし、記憶が復活して、もし不都合だらけの現実を受け止めねばならないとき、青年はどうすべきか分らない。耐えられるだろうか、現実に。

「心配要らないさ。記憶が戻ったら戻ったで、そのとき考えよう」

「坊主の言う通りだ。分かんねえ先のことをあーだこーだ悩んだって仕方ねえだろ。柔軟に対応しやがれ」

「おっ、流石はお父さん。言うことが深いねえ」

「うるせえ!」

二人のやりとりを見て、自分がどれほどの不安な顔をしていたのか、と恥じた。少年と木原は自分を心配してくれている。記憶喪失という面倒臭い爆弾を抱えている男に、この少年は二つ返事でこの家に住まわせてくれた。それは、風紀委員の義務だからか。

違う。

彼は自らの正義を掲げているいるだけだ。困っていたら手を差し伸べる、その行動がたまたま風紀委員と言う役目に当てはまっているだけだ。損得を秤に掛けず、勘定抜きの小さな善意。しかしそれは、大きな物として返ってくるに違いない。

青年は苦笑した。

それが記憶に引つかかるか、誰なのかは分からない。しかし、その善意が大切な物を守るための行動原理となるだろう。

英雄ヒーローと言う、大袈裟な名前を胸に。

とある青年の考え事（後書き）

木原くんマジお父さん。

意外にも主人公を説明する機会が書けないですなあ……。

さて今回は、主人公が主人公らしい活躍をしたりしなかったり。

路地裏チキンレース

路地裏。

本来は学園都市の生徒は学校に通い、青春を謳歌するはずなのだが、光があるところには必ず影は生まれる。世間に上手く馴染めずに、ここでたむろする人等をスキルアウトと呼ぶ。スキルアウト同士徒党を組み、やがて一つのグループを作る。グループを作るだけならば誰も迷惑は掛からない。しかし、グループ同士の紛争により、資金源に困り銀行強盗やATMの破壊や、民間人が巻き込まれるなど、被害が出るのならば話は別だ。被害を拡大させる前に即座に犯人を確保しなければならない。

だが、ジャッジメント風紀委員はその権限はなく、むしろ生徒同士の喧嘩の仲裁や迷子の搜索、落とし物を預かるなどと言った仕事の主。その代わりに派遣されるのが警備員だ。アンチスキル構成員が教師で、犯罪を取り締まるのが役目だ。しかし、それは建前であって、能力者の生徒にいい顔をさせたくないからと危険なことは大人に任せろ、という理由も添えておく。

その風紀委員に所属しているのがこの少年、名前を鵜飼 銀乃助と言う。黒髪に茶色のメッシュを（不本意に）あしらった横に跳ねた

髪の毛を撫でながら、特製のローラーブレードで路地裏を滑る。右手には携帯を耳に当てていた。

「はあい、こちら銀。見事に偽情報でしたー。スキルアウトに因縁ふっかけられたので、アイテムとか言う組織に会わないように迂回しつつ合流するよー」

『ハッ、ザマアねえな。こっちは第二位と思しき男を確保したぜ。今は車でホームまで搬送中だ。ミドリも拾ったから残るはお前だけだな』

電話越しの相手はやはりというか、木原。ミドリというのは緑髪の青年のことだ。鵜飼は溜息を吐いて一言。

「……死ね」

『お前が死ね』

「生きる」

『何だそりゃ』木原も溜息を吐きたいようだ。『……こつちは会いたくもない顔に会って嫌気が差してんだ。三分で制圧したとは言え、ハウントドッグ元猟犬部隊の連中に指令を出すなんぞ今後一切お断りだ』

「あの人たちにも生活があるからねえ。肝を冷やしたろうに」

『傑作なのは塩を持ってこさせる奴がいてな。科学の街なのに科学を否定されちゃった。人間って怖えよな』

「言い返してやる、ザマア」

『うるせえ』

くつくつと笑いながら話をしていたが、

「見つけたぞ！」

どうやら後ろから発見されたらしい。鵜飼は後ろを振り返らずに、ローラーブレードの速度を上げた。

「悪い。帰るの遅れるかも。晩飯当番代わってくれない？」

『あ？ あー、仕方ねえな。ミドリに代わってもらうわな。……本人も良いってよ。じゃあな、死なずに帰ってこい』

「あいよー」

ピッ、と通話を切って携帯電話をジャケットの内ポケットにねじ込んだ。追っ手のスキルアウトはピタリと鵜飼の後をつけている。アスリート並に鍛えられたという話は嘘でなかった。

「いい加減諦めやがれ！」

「しつこいよ！」

バチバチと体に電気を流す。すると、モーターの稼働する音がして加速する。土煙を上げてスキルアウトたちの距離が段々開いてきた。

「いやっほー！！」

風が横に跳ねた髪を撫でる。鵜飼が密かに奨学金で貯めた、病気が治ったら使おうと決めていたローラーブレード。それを木原が（半ば勝手に）改良した。能力行使の際に少しの電流を流すことで、特製のローラーブレードに仕込まれている多数の電磁石型モーターがローラー部分に働き、自発的に回転をする。原理等の詳しいことは木原が楽しげに語っていたが、割愛する。脳の開発よりこちらの開発の方が向いている気がする、と鵜飼は内心からかった。

モーターが働くことで出る速度は60km/hを超える。それ以上は路地裏なので使わない。極力速度をセーブしながら路地裏を滑る。ゴミ箱を飛び越え、野良犬を避け、直角に曲がり、また進む。その速さはまさに雷の如く。

路地裏チキンレース（後書き）

調べてみたのですが、まだまだ勉強不足です……。

きっかけは、引っ越しの荷物を整理したときに出てきたミニ四駆です。

時速60kmのローラーブレードってどんな耐久力なんでしょうね
学園都市やべえ

過激な嘘八百（前書き）

少々ボリュームアップです

過激な嘘八百

同じく路地裏。

「ったく、とんだ偽情報を掴まされたわ……」

苛々しながら親指の爪を噛む女性、麦野 沈利。毛先にウェーブをかけた、背中まで伸びる亜麻色の髪の毛を揺らし、街を歩けば誰もが振り返るような美貌と抜群のプロポーションを保っている。しかし、その右目は義眼であり、左手にはカジュアルな服装に少々そぐわない白い手袋。その下には義手が施されているのだが、彼女は特に気にはしていない。

「まあまあ、第二位のことは超都市伝説だったからいいじゃないですか。超骨折り損なのは否めませんが」

麦野を宥めるのは絹旗 最愛。小さいながらも、中学生らしいミニスカートを履いている。そのミニスカートが見えそうで見えない角度を保っているが、木枯らしが吹くこの季節にその服装はいささか

危険だ。

「……つかよ、学園都市に都市伝説って無理があんだろ。それに、第二位は第一位にやら」

「それ以上文句垂れンなら窒素スマッシュですよ？」

二人の後ろを歩く少年少女。少年の方を浜面 仕上。茶髪の頭をがしがしと掻いて文句を言っていたが、振り返った絹旗の目が笑っていない笑顔に圧倒され押し黙る。チンピラを体現したような姿に似合わない、むしろ仕事疲れのサラリーマンのように肩を落とした。

「だいじょうぶ。はまづらは情報を手に入れただけ。悪くないよ」

片割れの少女が、そんなサラリーマンの肩を慰めるように肩を叩く。彼女の名前は滝壺 理后。ぼーとした表情とおかっぱにジャージ姿。他の三人とは浮いていて、話し方もゆっくりとしていて独特だ。慰められたサラリーマンは嬉しそうに、

「滝壺……！」

「はまづら、苦しい」

抱きついた。前を歩く二人は忌々しげに舌打ちをするが、浜面には聞こえない。そこに、

「ヒイイイイハアアアアア！！……ああああああ！？」

麦野の進行方向数歩先、Ｔ字になっている分かれ道で、黒と茶色の弾丸が、突き当たりのビルに激突した。麦野は何事かと身構えるが、その弾丸が人間だと判断すると、啞然として固まってしまった。

「ちよっ……。大丈夫？」

「……うええ……。目がチカチカする……」

目を回しているのはもちろん鵜飼。しかし、すぐさま頭を振り、気

づいたように麦野の顔を凝視する。

「誰ですか、この男？」

横にいた絹旗が方眉を釣り上げる。麦野も鵜飼のことを全く知らないが、雰囲気がどこことなく誰かと似ているところがある。

「う、わ」

絹旗は鵜飼が通ったルートを角から覗くと、スキルアウトたちが我先にと大勢で押し掛けてきた。

「……失礼」

目を手の甲で擦った鵜飼は麦野に非礼を詫び、仁王立ちで先程来た道を睨みつけて叫ぶ。

「おいコラテメエら！！　消し炭にならなくては大人しく帰れ！！」

滝壺に抱きつくのを止めた浜面と、何がなんだか分からない絹旗はあまりにも大きい声の大きさに耳を塞いだ。木原に教わった声による恫喝。威嚇にはうってつけだ。

鵜飼は自らのジャケットのポケットにしまっている、風紀委員の腕章を見せながら言いたかったが、スキルアウトたちは何もしてはいない。したがって、風紀委員は手出しは出来ない。しかし、風紀委員抜きでの戦闘ではそのことは関係がない。

「ンだとゴルア！？」

「調子乗ってんじゃねえぞガキが！！」

当然、威嚇というよりかは挑発に取られたらしく、激昂を買ってしまった。

（多勢に無勢、か。ここは死なない程度に能力ぶっ放して、帰らせるかにゃーん）

ニヤリ、と獰猛に笑い己の能力を行使しようとした麦野だが、鵜飼が目で制した。その目は見覚えがある。青臭い、それでいて明るく気に入らない目。

「……level5、だつての」

鵜飼が呟く。スキルアウトたちの視線が一気に鵜飼に集まった。

「ここに、level5がいるつての。俺の忠告を大人しく聞いた方が身のためだが？」

バチバチ、と青白い電気が鵜飼の前髪から弾かれる。それは段々激しさを増し、やがて、鵜飼の体を纏うようになる。肩の高さまで地面と水平に右手を上げた。手には、硬貨。

「こいつまさか……！？」

「第三位の超電磁砲！？」

「マジかよ……」

高ぶっていたスキルアウトたちの戦意が著しく低下する。ざわつき始めた彼らは一歩、また一歩と後退を始めた。

（……まさかあの第三位？ いや、ハツタリにはやけに説得力のある……）

「むぎの」

「どうした？」

思考を巡らせていた麦野に、ずっと沈黙を保っていた滝壺が口を開いた。

「あの人、第三位と同じだけ違う」

「はあ？」

同じだけ違う。矛盾を孕んだ言葉だ。さらに麦野を思考の沼へと沈み込ませる。

「何をやらかすか超分かりません。私が超盾になりますからみなさんは下がってください！」

一歩前に出た絹旗が残りの三人に呼びかける。麦野は一度、浜面を

前に押しやり、絹旗、浜面、麦野、淹壺の順に並んだ。

絹旗の能力は室素装甲。オフエンスアーマー levelは4。室素を操る能力を持ち、自動防御のような、常に主さのない頑丈な鎧を身に纏っているようなものだ。室素越しに車を投げたり、インファイトが得意だ。生半可な能力ならば防ぐことが出来る。

「……やっぱり浜面は私の前に来てください」

「やだね！ 死んでも断る！」

「はまづら、死んだら断れないよ」

「はっ………しまった！」

ショックを受けた間抜けな浜面から目線を外して、絹旗は鵜飼を睨みつける。この少年、先程淹壺が言っていた、「同じだが違う」と言う言葉がしっくりくるのかやけに雰囲気覚えがある。でも分か

らない。

刹那。

「喰らえエエエエエエエエエエ！」

鵜飼の絶叫の後、絹旗の視界が白い閃光に覆われた。

「……え？」

あれだけ大きな声を出して超電磁砲らしき技を繰り出したと言っのに、絹旗には砂埃一つも掛からなかった。戦々恐々として目を開くと、そこにあるのは数秒前と変わらない路地裏の薄汚いコンクリート。

「……はあ？」

間抜けな声を出したのは絹旗だけではなかった。麦野もそうだった。

「むぎの、きぬはた。横の雨樋だよ」

滝壺に言われるがままに右に振り向き、丁字の突き当たりの鉄で出来た雨樋を見た。そして、ゆっくりと視線を上へに。

鵜飼が、雨樋を垂直に駆け上がっていた。

「な、何だありや！？」

浜面も目を丸くした。よほどの人間でない限り、地面と垂直になっている雨樋に足を付け、駆け上がるなど到底不可能。やはり、

高位の能力者か。能力の類は電気使いで間違いないだろう。だとすれば、この違和感は何物なのだろうか、理解の終点が見えない。

「あらよつ、と」

鵜飼がビルの屋上の縁に手を掛け、よじ登る。振り返るとちょうど絹旗たちとスキルアウトを見下ろす形になる。そのスキルアウトも啞然として鵜飼を眺めていた。

「じゃーな、残念無念また来世ってね。バイバーイ♪」

手をひらひらと振って、ローラーブレードで走り出していった。ビルの屋上と屋上とを渡りながら逃げるに違いない。

「……ああ、なるほど」

絹旗はそこで、結論に辿り着いた。どうやら、麦野も滝壺もそうらしい。

level5は麦野のことを指していて、決してあの少年ではない。

「上等じゃない……」

視線をさらに右に向けると、麦野が憤怒の表情をしていた。いや、顔は笑っている。だが、目が笑っていない。額に青筋がくつきりと浮かんでいるのが手に取るように分かる。実際、level5のたまった鵜飼だが、自分のことではなく麦野を指していったことだし、しかもご丁寧に「ここに」という言葉も添えて。

結局はブラフ、麦野をダシにしたただのハッタリだった。しかし、あの電気、硬貨。雰囲気とあの第三位と重なる部分はある。

「お待ちなさいな」

そこに凜とした、鈴のような声が舞い降りた。

「あの方の連絡で駆けつけてみれば、なんとまあ最悪ですわね。またどなたかの怒りを買いましたか」

カツン、カツン、と革靴を鳴らす音が聞こえる。絹旗は再び視線をスキルアウト方向へ戻した。そこに、ツインテールの少女が二の腕を見せるように、突き出していた。

「ジャッジメント風紀委員ですの。仲裁に参りましたわ」

「ジャッジメント風紀委員……！？」

浜面は身構える。いきなり自分たちの前に表れて、風紀委員が腕章テレを見せた。先程の鵜飼と同じ、高位能力者か。しかも、能力は空間移動ポートに間違いない。

「さあ、今なら拘束など抜きで帰れますの。痛い目に遭う前にお帰りいただけます？」

だが、風紀委員の少女は浜面たちに背を向けていた。

「お、おい」

「お気になさらず。私は『男性一人と女性三人がスキルアウトに絡まれている』と言った通報を受けただけですの。さあ、面倒なことになる前に、早くお帰りあそばせ」

少女はそれっきり、スキルアウトに仁王立ちで睨んでいた。浜面はいち早く理解をする前に逃げた方がいいと、感覚で掴んだ。

「滝壺、麦野、絹旗。行こう」

「うん」

「……チッ」

「超分かりました」

引き返すことを三人に促し、浜面は殿を務める。一度、少女の方へ振り返り、

「……ありがとな」

「礼には及びませんの。これが、風紀委員としての誇りですので」

礼を言った。少女は肩越しに不適に笑うと再びスキルアウトを通らせまいと、一歩、歩みを進めた。

小さいながらも、なんとも頼りがいのある背中だった。

過激な嘘八百（後書き）

でした、ジャッジメントですよ！

事実、彼女に言わせたいが為に出しただけです。

本当は出さなくても良かったんですがね（笑）

次回も、アイテム編です。

木原くん出してえ……！

あ、ちなみに主人公の能力も説明できますです。

P・S 《修正》

浜面金髪じゃない……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889x/>

とある科学の自家発電《ブライト・ポイント》

2011年11月15日13時36分発行